

## 芸術作品を「読むこと (Lesen)」の解釈学的意義

### —— ガダマー解釈学における「像 (Bild)」論の展開

中央大学 土方 尚子

哲学的解釈学の泰斗の一人として知られるハンス＝ゲオルク・ガダマー (1900-2002) は、『真理と方法』(1960)の第一部にあたる芸術論において、芸術経験はたんなる美的な経験ではなく「理解」という解釈学的な経験に本質的にかかわることを唱えた。そこでは、近代美学の主観主義化の克服が主張されるとともに、「遊び (Spiel)」概念の存在論的究明を手がかりとして芸術作品の存在と芸術経験との関係をめぐる議論が解釈学的な観点のもとに分析されている。本発表はなかでも、ガダマーの芸術論における「像 (Bild)」概念を中心に、さらに『真理と方法』から晩年の論考「造形芸術と言語芸術」(1994)にいたるその理論的変遷を考察する。「像 (Bild)」とはそもそも、絵画や彫刻などひろく造形芸術を指すものとして用いられる語だが、ガダマーはその概念を、解釈学的な地平をめざす一環として、美学のおよび解釈学的な議論の次元を架橋するしかたで自身の芸術論のうちに組み込んでいる。

こうしたガダマーのいわば解釈学的像論の影響は、1960年代にガダマーに師事したゴットフリート・ベーム (1942-) の提唱する「形象の解釈学」に顕著に見いだせる。ベームはガダマーの像論を積極的かつ批判的に継承し、形象と言語という異なる媒体の解釈学的経験をめぐり「形象性 (Bildlichkeit)」を両者の共通の根拠として捉えることを試みた。像と言語の相互関係にたいする問題意識は、晩年のガダマーの思索にもまた、ベームとは別のしかたではあれ内在していたといえる。というのも、「言葉と像」(1992)やベームによって編集された論文集『像とは何か?』(1994)に所収の「造形芸術と言語芸術」といった論考において、ガダマーも像と言語の関係性を探究しつづけていたからである。

ガダマーの像論の展開を跡づけるために、本発表では彼の晩年の諸論考で顕在化する「読むこと (Lesen)」という主題に着目し、その内実を明らかにする。ガダマーによれば「読むこと」は、造形芸術と言語芸術の経験に共通の多面的な時間性をあらわす事態である。造形芸術の経験のプロセスを「読むこと」の解釈学的意義へと収斂させるガダマーの理路は、『真理と方法』において像と原像の根源的關係として打ち出された像の存在論を背景化させているかにもみえる。しかし、『真理と方法』の像論のうちで「表現の存在論的構造のなかにその基礎をもつ」と特徴づけられる「装飾性」および「建築」の概念が、のちの論考「造形芸術と言語芸術」でふたたび議論の対象となる点はいまだ検討の余地がある。晩年のガダマーの「読むこと」という主題を介して、先行研究でも明確に指摘される機会の少なかった「装飾性」および「建築」の論点も包括しつつ、『真理と方法』以降の像論の思想的連関および展開を描くことが、本発表の最終的な目的である。